

VIEW21

ビュー21

2013

Vol. 3

小学版



家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

特集

総論 東京都杉並区立堀之内小学校校長 **渡部公威** / 同校教諭 **竹内不二子**
ベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室室長 **木村治生**

学校事例 福井県敦賀市立中央小学校 / 新潟県妙高市立妙高高原南小学校
神奈川県川崎市立南百合丘小学校

展望 早稲田大教職大学院教授 **田中博之**

私を育てた
あの時代、あの出会い

京都府京都市立高倉小学校校長 **門田真澄**

Benesse発
これからの教育

東京都多摩市立南鶴牧小学校 絵の制作を通じた交流でグローバル意識を育む

つながる
学校と家庭の学び

佐賀県伊万里市立南波多小学校 学習習慣定着と授業研究に小中が連携して取り組む



昨年12月のある朝8時。多摩市立南鶴牧小学校の5年生が待ちに待ったアートマイルプロジェクトの交流校、カナダのValley View Elementary Schoolとのテレビ会議による交流会が始まった(写真1)。

「Tanabata is a traditional event of Japan.」と、日本の子どもが飾り付けをした笹と、織姫と彦星の紙芝居を紹介すると、テレビ画面から「Wow」と歓声が聞こえ、

拍手が沸き起こる。一方、カナダの子どもが町で熊が捕獲された新聞記事や校庭にガゼルという野生動物が来た写真を見せると、「えーっ」と日本の子どもが驚く。互いに自分たちの文化や生活の様子を伝え、最後に日本の子どもが半分描いた絵を披露し、1時間はあっという間に終わった。

「カナダ人は特別な存在ではないと、子どもは肌で感じたのでしょうか。感想文に『大陸も、生活の仕方も違うけれど、僕たちと同じだと思ふことがいっぱいありました』と書く子どももいました」と担任の小辻裕美子先生は言う。カナダ・バンクーバーとの時差は17時間。日本の朝8時は現地では前日の15時だが、子どもにとって、その距離が一気に縮まった1時間だった。

外国の同世代と協働する原体験を

東京都多摩市立南鶴牧小学校

絵の制作を通じた交流でグローバル意識を育む

2013年5月、教育再生実行会議の第3次提言に、小学校英語を教科化することが盛り込まれた。

急速に進むグローバル化を背景に、義務教育段階からグローバル人材を育成する環境を整えようという動きが顕著に見られる。

今号は、大型の絵を協働制作することで、海外の子どもたちとの交流を深める事例を通して、グローバル教育について考える。

School Data



東京都多摩市立南鶴牧小学校

◎1982(昭和57)年開校。約5000㎡の校庭芝生、ビオトープ、屋上の太陽光発電などを生かした環境教育、植物栽培や動物の飼育などを通じた人権教育を基盤としたESD(*)を推進。
校長 吉田正行先生 / 児童数 530人 / 学級数 20学級(うち特別支援学級4) / 所在地 〒206-0034 東京都多摩市鶴牧5-43 / TEL 042-372-1860
URL <http://www.tama.ed.jp/s-tsuru/>

で、人種や外見などで人を判断するのではなく、実際にかかわることの大切さを実感してほしいと考えました」と説明する。

同校では毎年、5年生が参加。主に「総合的な学習の時間」に次の手順で活動を進める。1学期は、外国語活動の時間に英語でのあいさつや自己紹介などを学び、また交流したい国を挙げ、外国へのイメージを膨らませる。8月に交流先が決まると、9

アートマイルとは、大型の絵の制作を通じて海外の子どもたちと協働する体験をさせようという世界的なプロジェクトで、日本での活動を支援する「ジャパンアートマイル(JAM)」は2005年に発足した。南鶴牧小学校は11年度から参加。その理由を吉田正行校長は、「グローバル化が進み、日本においても海外の人と協働して物事を進める場面が、今後ますます増えると思います。文化的背景や価値観の異なる世界の同世代の子どもと生身の交流をすることで、

* Education for Sustainable Development の略。持続可能な開発のための教育のこと



多摩市立南鶴牧小学校校長

吉田正行

よしだ・まさゆき 「子どもたちにたくさんの良質な原体験をさせたい」



多摩市立南鶴牧小学校

虻川学

あぶかわ・がく 生活指導主任。6学年担任。「相手の良いところを見付け、良い人間関係を築く力を育てたい」



多摩市立南鶴牧小学校

小辻裕美子

こつじ・ゆみこ 研究主任。6学年担任。「子どもたちが失敗から学び、次に生かそうとする気持ちを育てたい」



上/写真1 交流校とのテレビ会議で、七夕の飾り付けを実演 右/写真2 協働で描いた絵。左がカナダ、右が日本で、内容は両校が話し合って決める。日本の鶴に対してカナダはグース、桜に対して楓など、代表的な文化や自然を表現



月からは、定期的に自己紹介文と写真を交流先に郵送したり、電子フォーラムにアップしたりして、子どもたちが互いに自分や学校のこと、地域や国を紹介し合う。更に、12月にはテレビ会議を開き、子ども同士が直接交流する。これらの活動と並行して、同校の子どもがキャンパス(縦1.5m×横3.6m)の半分に絵を描き、交流先に郵送。交流先が残り半分を描いて完成させたら、返送される(写真2)。交流校は11年度はパキスタン、12年度はカナダだった。

6学年担任の虻川学先生は、昨年度のカナダとの交流を振り返ってこう話す。

「目的が明確なため

か、自分のことを相手にきちんと伝えたいという姿勢が子どもに強くあり、自己紹介の英文を書く際にも辞書を引き、A・L・Tに質問するなど、自ら意欲的に取り組む姿が数多く見られました」

冒頭で紹介した七夕の飾り付けの実演や紙芝居などは、子どもたちのアイデアだ。

「子どもたちは言葉で伝えられないなら、他のことで伝えようと言い、テレビ会議では、他にも浴衣を着たり、歌を歌ったりとさまざまな工夫をしていました。自分たちでより良い方法を考え、創造力を発揮する姿に頼もしさを感じました」(吉田校長)

自国である日本や、他の国への好奇心、そして英語学習への意欲も高まっている。

「相手に伝えるために調べた日本の文化や自然ですが、自分の国を深く知ってよかったですという声も多くなりました。他の国とも交流したい、もっと英語を学びたいと言う子どももいます」(虻川先生)

同じ部分を感じて、距離が縮まる

最初は相手の国について何も知らなかった子どもが、交流を始めて、まず相手の国との違いを感じ、日本を再認識し、更に、直接話すという相手の息遣いが感じられる交流をすることで、自分と同じ部分を感じ取る。どんどん変化する子どもを目の当たりにし、経験を伴う活動の重要性を感じた

と教師は口をそろえる。

「パキスタンとの交流時に、『紛争のイメージがあり、怖いと思っていたが、勝手なイメージで決め付けずに、その国のことをよく知ろうと思った』と書いた子どもがいました。そう気付いた子どもがいたことをうれしく思いました」(吉田校長)

「どの国の人も自分と同じ人間だと実感することは平和にもつながるでしょう。そういう意味で、国際交流は互いの距離を縮める手段でもあると思います」(小辻先生)

グローバルに活躍する人材を育てるために小学校教育で何ができるのか。その1つの答えが同校の取り組みにある。

これからの教育に生かせる視点

◎外国や外国の子どもをリアルに感じ、多様な価値観に触れることは、外国語を使ってこそできる貴重な原体験です。正解を出すための知識習得学習と異なり、絵の制作や日本の紹介活動などを通して、伝えたいことを考え、判断し、表現することで「グローバルな視野を持つて自ら考えて行動する力」が育ちます。

「子どもは場を与えれば、どんどん考えられるようになる」という吉田校長の言葉が印象的でした。

ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室
主任研究員 加藤由美子